

今日世英住最勝道

此一段は仏陀は世界中道徳上絶対的無比の大人格者である故に世英と云う。即英靈は至善至聖神靈威徳玲瓏玉より麗わしく、高潔皓雪よりも清く、実に完全円満なる大靈格を備え給いき。人其慈顔に接すれば慈愛の暖なること禽獸までも睦れ親しみ巍々たる威嚴に接すれば天魔外道憍慢の輩も威伏す。万徳完備し至善の英靈實に人中の道徳的太陽なり。世英と云う仏の所得の大道は絶対至善の極致なり。之を阿耨多羅三藐三菩提と云う。訳すれば無上の大道一切諸仏の住処至善円満の中心なり。宇宙最高等の靈府無上法王の帝都なり。諸の菩薩聖者が一切諸善波羅蜜を以て実践躬行の結果終局の帰趣する処なり。斯至善の神国に到達すべき大道法を阿耨多羅三藐三菩提と云。真天に通ずる道なり。它に換て云わば、基督が我は我道を行にあらず神の道を

行くと云い、孔子が天命の性に随う、道を正しく行わば、至善の天に達すと云も同じ。其觀念内容に於ては其色眼鏡によりて異なき能わず。絶対至善の靈府に達する大道法たるに於ては同一なり。是公明正大なる天下の大道にして私心を以て造たる道にあらず。

仏陀は斯最勝の大道を得たり。自ら斯大道の終点に達し、絶対法界宮の無量光天に接し、其命令の下に一切衆生をして迷妄なる六道偏狭なる小乗二乗の小道より引出し、絶対無上の大道に一切を誘引して本来の父王と父子相向わしめ、各自を法王の子とし各無上の王道即ち光明の大道徳を以て人生向上の一路と決定すべきことを教え給えり。

仏陀は世の英霊

仏陀が道德的人格の世に卓絶したる所以は輕毛の凡夫の枚挙する能わざる處、仏陀此大道を得人格革新し、最円満に完成したるを仏陀と号す。仏陀とは梵語訳すれば覺者にて此に三義あり。自覺覺他覺行円満是なり。

自覺とは十方三世常住と無常等の法を悟り、自性の真空を悟り、諸惑の虚妄を了したるの太陽昇る時闇黒悉く去りて如々に妙智を成じ、円覺を証す故に自覺と名づく。二、覺他。無縁の慈悲を運んで諸の衆生を度し自己と同じく悟らしめ、また生死の苦を離れて涅槃の常樂を得せしむ故に覺他と名づく。三、覺行円満。智慧と道德とを併べて完成し万徳悉く備り絶対無上の王宮に昇り位妙覺に登り万行円満に満ちたるを覺行円満と名づく。

在世の徳化。仏陀の靈的人格の至英至靈なるは其教化の行わるる處悉く道德化せざるなし。經に示されたり全体此世界の者は其まに放縱せば惡をなすこと多く自然に善良に進みゆかぬ。生存競争に私慾のみ強く互に相欺き合つて心を勞し、形を困し

め、苦を飲^くみ、毒を食^{どく}う。是^{この}ようにして双務^{そうむ}して未^{いま}だ曾^{かつ}て寧息^{ねいそく}することがない。吾^われ汝^{なんぢ}等^ら人類^{じんるい}を憐^{あわ}れみ、苦心^{ねんご}に誨^{かい}諭^ゆして教^{おし}えて善^{ぜん}を修^{しゆ}せしむ。されども器^きに随^{したが}つて開導^{かいどう}して經法^{きやうほう}を授^{じゆ}与^よするに承用^{しょうよう}せざるはなし。意^{このころ}の所願^{しよがん}に在^{あつ}て道^{みち}を得^えせしむ。仏^{ほとけ}の遊履^{ゆうり}するところ^{ところ}こく^{こく}ゆう^{ゆう}く^くじゆ^{じゆ}所^{ところ}の国邑^{こく}丘聚^{きゆうしゆ}は化^けを蒙^{こゑ}らざる無^なし、天下^{てんげ}和順^{わじゆん}し、日月^{にちがつ}清^{しやう}明^{みやう}なり、風雨^{ふうう}時^{とき}を以^{もつ}てし、災厲^{さいれい}起^{おこ}らず、国豊^{こくにゆた}かに民安^{たみやす}して兵戈^{ひやうが}用^{もち}ゆることなし、徳^{とく}を崇^{たつ}み仁^{じん}を興^{おこ}して務^{つと}めて礼讓^{らいじやう}を修^{しゆ}すと。

仏滅^{ぶつめつ}後の徳化^{とくか}。仏在世^{ほとけざい}の徳化^{とくか}の隆盛^{りゆうせい}なることは無論^{むろん}なるも、仏滅^{ぶつめつ}後に於^{おい}て仏教^{ぶつきやう}の行^{おこな}わるる処^{ところ}として化^けを被^{こう}らざるなし。曾^{かつ}て魔神^{ましん}を奉^{ほう}じたる人民^{じんみん}の陋風^{ろうふう}弊習^{へいしゆう}の甚^{はなはだ}しかりし処^{ところ}も仏陀^{ぶつだ}の教^{おしえ}の行^{おこな}わるるに曼^{まよ}んでは民大^{たみおお}いに徳化^{とくか}す。曾^{かつ}て聞^きくシヤム国^{こく}の往古^{おうこ}の土人^{じん}は実^{じつ}に蛮^{ばん}的に食人^{しよくじん}種^{しゆ}に類^{るい}したるものなりと。然^{しか}るに仏教^{ぶつきやう}其国^{そのくに}に入るや人民^{じんみん}の風習^{ふうしゆう}一^{いつ}変^{へん}して最^{もつ}も善良^{ぜんりやう}の民^{たみ}に化^かしたりと。

仏教^{ぶつきやう}が始^{はじ}めて後漢^{ごかん}に入りしは孝明帝^{かうめいてい}の時^{とき}なり。帝夢^{ていゆめ}に靈神^{れいしん}を見^みる其神威^{そのしんい}端正^{たんしやう}肩後^{けんご}光^{こう}

明みょう赫かく々として眩げん瞞まんす。時ときに帝博士ていはくし伝でん奕えきに問とう、其その感かん見けんの想そう何なんと名なく。伝でん奕えき云いく、臣しん曾そうて聞きく西方さいほうに聖ひじりあり。仏ほとけと名なづく。其その教おしえは治おさめずして治おさまり無む為いにして成なる。蕩とう々乎とうとして民たみ之これを名なづくるなし。強しいて名なづけて仏ぶつと云いう。陛へい下か夢ゆめ見みし玉たまいし処ところ果はたして是これならんと。実じつに博士はかせ伝でん奕えきが奏そうせし如ごとく、仏教ぶつぎょうが支那国しなこくに入るや一度いちど其教そのきょう化けに浴よくしたるもの如に来らいの威い靈れいを信しんじ、自然しぜんと精神せいしん的てきに人民じんみんを徳とく化かす。其教そのおしえは神聖しんせいなる如来にょらい靈光れいこう赫かく々として常つねに我前わがまえに嚴臨げんりんし玉たまうことを信認しんにんする時ときは人自ひとみづから正ただしきに帰きすればなり。

されば支那しな十代じゅうだい奉ほう仏篇ぶつへんの如ごとき後漢ごかん以来いらい歷代れきだいの聖王せいおう賢臣けんしん、仏陀ぶつだの教おしえに依よりて精神せいしん的てきに自みづから尊そん崇そうし人民じんみんを徳とく化かす。実じつに其靈そのれい的てき徳化とくかの偉大いだいなること言いうべからず。彼かの道徳どうとくを經書けいしょの講義こうぎに追求ついきゅうしたる人じん為い的てき道德どうとくに比ひすれば、国民こくみんに及およばしたる効果こうか同日どうじつの論ろんにあらず。

吾国わがくにに於おいても歷代れきだいの帝王ていおう大おほに仏ほとけを信しんず、厚あつく三宝さんぼうに帰きし玉たまえる歷代れきだいに三十八主しゆじゆの賢けん明めいの帝王ていおうが授戒剃度じゆかいていどして仏ぶつに帰きしたる如ごとき、其原因そのげんいんは仏陀ぶつだが曾かつて王位おういの尊たつとを献ささげて無む

上道じやうどうを求めたるを慕したうてここに至いたり給たまえる。若し仏陀ぶつだの得玉えたまう処ところの大道だいうどうは実じつに絶對ぜつたいてき的に權威けんいある無上むじやうの道德どうとくの淵源えんげんにして、此無上このむじやうの大道法だいうどうほうに依よらざれば畢竟ひつきよう永遠えいえんの解脱げだつは得難えがたく、無上正覺むじやうしやうがくの帝位ていゐに昇のぼること能あたわず。是これは仏陀ぶつだが人格じんかく的英靈ていきえいれいにして無上むじやうの大道だいうどうを得玉えたまえるに倣ならいて無上むじやうの大道だいうどうを得えんが為ために歴代れきだいの帝王ていおうは厚あつく信奉しんぼうし玉たまえり。

最勝道と無量光

嚮さきに論ろんじたる如ごとく仏陀ぶつだは大哲人だいてつじんにして大宗教家だいしゆうきやうかたり。大哲人だいてつじんとしての自覺じかく々他覺たかくぎやう行ぎやう円満えんまんなる仏陀ぶつだは、大宗教家だいしゆうきやうかとしては、無量光むりやうこうに歸命きみんして如来にやらいの神聖しんせいと正義せいぎと恩寵おんちやうとの光明こうみやうに依よつて復活ふつかつせよ、靈化れいかせよ、光明こうみやう中の靈格れいかくとして活動かつどうせよ、行為こうゐせよ、すべての善ぜんすべての道德どうとくは自おのから具備ぐびすべし。所以ゆゑんは如何いかとなれば一切衆生いっさいしゆじやうは本法身もとほつしんの子ことして各自かくじ仏性ぶつしやう具有ぐゆうす。若如来もしにやらいの光明こうみやうに依よつて復活ふつかつし靈化れいかせらるる時ときは神聖しんせいと正義せいぎと

おんちよう 恩寵とに徳化すべき性を有ておる。聖道的に自覚々他覚行円満は宗教的に云わば如来の三徳に靈化したる事なり。前者は自己の力を以て開発し完成することを教え、宗教は絶対者の威神の光明を仰ぎて靈化すべきことを教う。聖道家が初発心より究竟成仏に至るまでの幾多の階級を履行する如く、宗教にして如来の光明靈化につきても初めて信仰の種子を播してより帯根を固し長養し開華結果に至るまでの階位を経ざるべからず。要する処今は宗教を以て仏陀を祖述す。故に仏陀が自から弥陀の靈光に徳化したる人格を以て自ら弥陀大道德光明の王都に安立し、すべてを弥陀光明の大道に誘引して衆生をして円満に靈格を完成し、諸仏同体の無上位に進ましむるを以て此段の目的とす。

道徳の意義

道德論には善惡の標準に就て衆説あり。形式主義あり。目的主義あり。目的の中に
 は功利主義、快樂主義等ありて未だ善惡の標準説を一定することは不能ならん。然れ
 ども人間の學者輩がいかに論ずる共法界の道理は法爾法然として決定しておる。即
 ち相對界の善惡の因に苦樂の果を招き、此因果法は生物の所謂の瓜の種より瓜が生じ
 人の子に人が生るる如く神識の上にも夫に例すべき因果の理法が存して善惡苦樂の六
 道なる業の道が存在する。この業道には必ず其に相應して果を得尚進んで相對的の生
 死を超越したる絶対の靈界なる至善至靈の神の國に到達すべき大道あり。之を無上大
 道と云う。この大道に乗ずれば必ず仏果に至る。各其精神の置所と意欲の目的を殊に
 して其の意欲の帰趣する處、善あり、惡あり、各三等に分れ各自の情操と欲望とが六
 道の中何れにか向つて各自の阿頼耶識という靈魂に其人格の核を成熟せんとしつつ人
 生を夫に献げて居る。之が即業道と云。各自の行業の道の趣く處が地獄とも人間
 とも造作するのである。即ち自己の阿頼耶識なる靈魂に畜生道の非人格行為を以て自

己の性格を造爲したる結果は靈魂の実が即ち畜生道であるから後に畜生の生を受けるのは苦瓜の種を播てまた苦瓜が実るのと異った事はない。故に六道の道とは能通の義にて六道の生死善惡の因に依て苦樂の生を受ける。六道相互に通ずる自然の道がある故に道と云。然れば道と云わば必ず善に到達する道のみに非ず。世に惡徳と云い非道と云うが如き、惡に通ずる道がある。恰も世間の道路に国道あり県道あり里道等があるが如く、其目的の地に達せんとせば、其定まれる道に依らざるべからず。仏陀の教によれば、三惡道は実に非道なるが故に教えて避けしめ三善道は或人には努めて行わしめ最も高等に進みたる人には人天の果報は幻化の如し、是また生死輪廻の處なれば去るべしと教え玉う。

人格の三種

人の情操と意志との欲望に随つて人は種々の方面に發展す。謂ゆる性相近し、習相遠しと云如く、是全然真理に非ざるも半面の真理あることは争うべからず。今現在若は全聚落に亘り或は全国に渡り、人の情操と意向と欲望、人生の目的觀の如きを能く点検する時は善惡邪正の因、六道に向て日々の行為を以て人格を形成する形は人類たるも、其情操と行為に於ては餓鬼道に陥れるあり。其非倫非行の人面獸心たるあり。傲慢無顧只名譽や權利のみを追求して人生虚栄の権化たる修羅道なるあり。其人格の高等なる真に侵すべからざる權威を以て自己の劣等欲を制する力ある人士あり、また公明正大博愛仁慈実天人の如きあり。斯の如く人格を大別せば三階に區別するを得べし。

非人格とは仏教に所謂地獄等の三惡道に墮落すべき性格の類、最其心の邪にして行の惡なるに三等あり。上品なるは地獄、中等は餓鬼道にして下等は畜生道なり。

人格具備する中に三等あり修羅人間天上是なり。

靈格に三等あり、声聞と縁覚と仏となり。是に因位に菩薩果位は仏陀之を一法界といふ。仏教は一心を本とす。此一心何に依て十界に分れゆくか其理由を略説せん。

十界の性格

仏教が人生の帰趣を教え人格を養成する所の目的は仏陀に倣いて終局は成仏を目的とす。人は成仏し得べき性能を具有することは先に述たり。今十界を略説せば、
仏教は一心を以て万法の本とす。人の一心に十界の性を具有しておる。而して人々の善惡等の業作が十界の内の何れか一の道を造為する。此一心を二に分てば迷と悟とす。迷の凡夫の中に善惡の二あり。善惡共に三等合して六道とす。悟の聖人に三等に分ちて大中小とす。小は声聞にて、中は縁覚、大は菩薩が因位にて、仏陀は果位であ

る。

迷の六凡の中、初めに惡に三等、地獄、餓鬼、畜生にて、地獄には八寒八熱の地獄あり。其中の衆生、火に焼、水に閉され無量の苦惱を受く。是上品惡業の所感なり。

二、餓鬼道。此鬼類は諸趣に散在す。福德ある者は山林塚間廂の神と作り福德なき者は不淨処に居り。飲食なく、飢渴の苦無量、諂誑の心にて、中品の逆惡を造りし者此報を受く。

三、畜生道。また傍生と云或は山野に住し、水中に栖み、披色載角鮮甲羽毛、四足多足無足、有足等互に相呑噉して苦を受くること極りなし。之れ下品の惡業から感ずる生類である。

次に三善道。

一、修羅道。阿修羅。訳すれば非天、淨名疏に此神は果報最勝、天に隣次すれども天に非ず。因に在て猜忌の心を懷きて五常を行うと雖ども憍慢心虚栄心心に強く勝

他たを欲ほつする故ゆえに下品げぼんの十善じゅうぜんを作なして報ほうを感じかんて生しょうず。之これを修羅道しゆらどうと名なく。

二、人間道にんげんどう。人にんとは忍にんなり。世よの違順いじゆんの境きやうに皆能みなよく安忍あんにんす。故ゆえに人ひとと名なづく。能よく仁義礼智信じんぎれいちしんの五常ごじやうを行ぎやうじ具ともに中品ちゆうぼんの十善じゅうぜんを修おさむる者ものの報ほうを感じかんて生しょうず。之これを人道じんどうと為なす。

三、天上道てんじやうどう。天てんとは天然自然てんねんしぜんとして、楽勝らくすくれ、身勝みすくれ、清淨しやうじやう光明くわうみやう世間せけんに無比むひ三界さんかいの天てんありと雖いえども上品じやうぼんの十善じゅうぜんを修おさめ兼かねて禪定ぜんじやうを修しゆして身心清淨しんじんしやうじやうにして、此報このほうを感じかんず。之これを天道てんどうとす。上来善惡各三等じやうらいぜんあくかくさんとうにして苦樂の果報くらく かほうを異ことにするも六道ろくどうとす。

四 聖 道

一、声聞道しやうもんどう。声聞しやうもんとは、仏ほとけの声教せいきやうを聞きき、四諦しだいの法ほうを修おさめて真空しんくうを証しょうすること、声聞道もんどうと云いう。是これしし小聖しやうしやうなり。

二、縁覺道。えんがくどう 縁覺とは仏ほとけの教法きようほうを稟うけて十二因縁じゅうにいんねんと真空しんくうの理りを覺さとる。之これを縁覺道えんがくどうと云いう。

三、菩薩道。ぼさつどう 菩薩ぼさつは梵語ぼんごにて具つがさには菩提薩埵ぼだいさつた。華しなには覺有情がくうじようと云いう。自行成就じぎようじようじゆして而しかも一切衆生いつさいしゆじようを覺さとらしむ。是これを菩薩ぼさつと名なづく。

四、仏陀道。ぶつだどう 仏陀ぶつだ、華しなには覺かくと訳やくす。覺かくに三義さんぎあり。一に自覺じかく、自みづか性しやうの眞常しんじやうを悟さとり惑わくの虚妄こもうを了りようす。二に覺佗かくた、無縁むえんの慈めぐみを運はこんで有情うじようを度どす。三には覺行円満かくぎやうえんまん、謂いわく万行具足まんぎやうそくして三界さんかいの師しと為なる之これを仏陀ぶつだとす。菩薩ぼさつと仏陀ぶつだとは、因位いんいと果地かぢの異ことなりのみ。今斯十界いまこのじつかいを十道じゅうどうと名なづけたることは善惡悟迷ぜんあくごめい、有漏うろと無漏むろと善ぜんと惡あくとの因業いんごうに依より苦く樂らくと眞淨しんじやうの果かを得うる。自然じねん法爾ほうにの道みちあり。十界じっかい何れも心こころを本もととして法界ほうかいに定さだまり有ある業道ごうどうに依よつて其果位そのかいに達たつす。世間せけんの国道こくどう県道けんどう等の道みちの如ごとく人ひとの善惡ぜんあくの業道ごうどうなり。

人間中の十界

十法界は同一の法界心を本とし、善惡の業道に依て六道に変現す、天台大師は十界心理に各十界を具すと実に然り。人間の心に地獄より仏陀に至までの性能は本来具しておる。夫が種々の因縁に依て種々に變轉す。人間に十界の性具しておるが故に今現身は人類にて有ながら其心意に於ては既に地獄の業熟せるあり。六道何れにか其人の終生は其人格の核とも云べき業識なる靈魂に各自は已に業が熟し、また当に熟せんとしつつある故に其人の性格上に人類を十界に區別することが出来る。

十界中大体に人格を三位とし一、非人格、二、人格、三、靈格。非人格は三等あり、一、地獄格。二、餓鬼格。三、畜生格。今現に人類中に於て各自の性格を能く点検したらば、地獄の性格も餓鬼的人格も人間にして、其の人道的人格も有る。例えば形

は人間たるも、其精神の意向と欲望目的及び行為に於ては人道の埒を逸し餓鬼道畜生道に墮落する者あり。実は皆々然るが如し。

人には十界の何れにも、成得らるる性能を具ておるけれども其人の人格を形成するに就ての因縁は六道の内何れか各自の意向欲望等の強き方に向て性格を淳化する。今暫らく人類中に於て、六道の性格あることを明さば一地獄格、或一類あり。其性邪惡にして残忍酷薄なるあり。惡逆無道にして因果を撓無し、聖人の教を亡し不仁破簾恥奸詐邪偽百端にして、其害毒を四方に及ぼしまた其暴行反逆、人をして凜慄せしむ。上に在りて喪誅の如き下に在りては彼の盜石の類、其逆惡邪見に依りて惡業の性質同じからざるも種類を同うす。すべて上品の逆惡の性格が地獄的の性格を造る。

次に餓鬼性格とは、餓鬼に種類多し。今二種を挙げ無財と有財との二種無財とは、鬼道に墮て飲食なくして常に飢渴の為に甚しき苦を感じるものなり。現に世の人生は只食色等の肉の快樂を以て目的の如く謂い其の肉の快樂が恰も習慣性より、酒食に

女色に病的となり、而して自から活業を治めず、詐偽窃盜等の罪惡を侵しても肉慾を放にせんとの類は是習慣性が已に酒色の餓鬼性格に陥入りつつあるなり。また有財鬼とは世に病的の守銭奴あり。仁義礼節をも顧みず、他を忘れ他人を排斥しても自己の我欲を放縱にする貪戾家、卑怯家あり。彼は死しても金に執著して離るる能わざるというの類を有財鬼の性格とす。

次に畜生性格とは世に形は人類たるも仁義五常の常倫もなく、横暴虎狼の如くなるあり、人を媚誑する狐の如く横着なる貉の如く愚に執拗なる長虫の如く、人を刺毒すること蝎の如く、また豺の如く猿猴の如くなるあり。人には高等なる理性あり、之をよく發達して自己の動物慾を抑制してこそ人格は具備す。只動物欲のみを以て足れりとするもの、形は人類たるも其精神性格は動物なり。是を畜生格とす。

已上三類は非人格にして畜生格は善惡共に發展せざる矇昧なるもの餓鬼性格は動物の本能に止まらず意識的に自己の知恵を悪用して肉慾及び我慾を逞しうせんとの惡欲

望ぼうの故ゆえに惡欲望あくよくぼうが病的びょうてきに發達はつたつしたる輩やから、地獄格ぢごくかくは邪智じゃち邪見じゃけん逆惡ぎやくあくの方面ほうめんに強度きやうどに發達はつたつしたるもの、三者さんしやいづれ何も人格じんかくを具備ぐびしておらぬ故ゆえに非人格ひじんかくとす。

人格具備せる三等

三善道さんぜんどうは何れも善ぜんにして此三種このさんしゆは人格具備じんかくぐびする者中ものうちに就つて智仁勇ちじんゆうの中に仁慈博愛じんじはくあいの仁じんを本もとにして、智ちと勇ゆうと、次第しだいするものは天道てんどう的で、智ちが強く仁じんと勇ゆうとを兼ねる者ものは人道じんどう的、勇ゆうは強く智ちは次つぎて仁じんの乏とほしきは修羅道しゆらどう的なり。

修羅道格しゆらどうかく。世よに仁義五常じんぎごじやうは具ぐすれども其性そのせい至いたつて傲貢高慢勝他ごうまんしやうたの念強ねんつよく、また虚栄心きよえいしんも深く、慈善心じぜんしんなきに非あらざるも、只名譽ただめいよの爲ために金かねを投とうじすべて一切公共事業いっさいこうきやうじぎやうにも社交しやこうにも只僞慢ただきやうまんと虚榮きよえいの爲ためのみ、只自己ただじこの權威けんいとか名譽めいよまた位置等いちちやうに熱望ねつぼうし全く彼かれは僞慢きやうまんの権化けんげなり。甚はなはだしき野心家やしんかなり。上かみにしてナポレオン又カイゼルの如ごとき、下しもにあり

ては己が無智無能を省ずして選挙の逐鹿に身心を賭し競争場裡に常に苦惱煩悶せ
る輩は是修羅格なり。

次に人道格。生を人類に受たるも必ずしも人格具備したりと云えぬ。人類も亦動物
である。因に於ても生後の薰陶に於ても最も能く人格を形成すべき修養なき時は全く
人格具備すべからず。人格具われる人と云わば儒教に謂ゆる仁義礼智信の五常身に備
わり、常識完全にして己を修め家を齊へ国家の義務を重じ公共事業に尽し社交を能
く和して他の為に敬せらる如きは人道格具われる人である。

天道格。仁慈博愛公明正大只独り自ら道德完全たる賢人君子たるのみにあらず。人
格の光明能く若しは国家に、また衆に及ぼすこと、太陽の光六合に照すが如き上に
在て堯舜禹湯の如き、また神武仁德帝の如き下に在りても世の爲、人の為に己を犠牲
にして寧ろ喜びとす。仁人君子は是天道格とす。

斯三者其性向と、道德的高低ありと雖も皆人格具備せる者とす。

靈 格 三 位

人類には十界の性能を具有す故に常に人格具備するのみに止まらず、奥底に潜伏せる靈性開發する時は個体我を解脱して絶対大靈と合致し、靈妙不思議の神に契合すべき性を有す。此靈性を開きて絶対の大靈と合したる聖者の中に消極と積極と、また分と全との別ありと雖も、すべて此らを通じて靈格とす。

一、声聞格。斯性格は通じて云わば羅漢、また仙人の類にて斯等は人類の塵境を避け五欲を遠ざけ、無我の境に入り天地同根と成りて神通如意此身より火を出し、また水を出し、種々の神変を現わし、出沒自在の靈妙なる精神の働きを作す。而して其目的は真空無為の境に入りて、また独り永恒の安穩を得るにあり。自己の靈と絶対的大我真如と一体に歸すれども、真空の方のみを得て未だ不空の方面は能せざる処斯らを

声聞格と云う。

二、緣覺格。十二因縁を觀じて、生死の源を悟達して真空真如を悟証するを緣覺と云う。世に専ら哲學的研究に智を用い宇宙の実体とか、また認識の淵源とかに全心を投じて哲學の眞理を發見することに熱注す。斯る人は非常に靈智に秀で理性が絶對と合一す。然れども宗教者の如く絶對を活ける父とし、靈的生命の泉源として活ける生命の血が絶對者と通ておらぬ。また人類を摂化しようとはせぬ。寂寞たる理智と思索の上に神を認めておる。斯の如きの性格を緣覺と云う。斯る哲學的の智力は自己獨特の天才にて他人に誘導すべきものではない。

三、菩薩格。菩薩とは、菩提薩埵とて菩提は仏にて薩埵は衆生である。衆生未だ一分も仏陀の光明を得ざる程は薩埵のみである。初發心して一分も光明を得れば菩薩と云う。喻えば衆生の性は晦日の如く初發心の菩薩は新月に比すべし、漸次に明度が増長するは菩薩の五位に例すべく、十四夜の月は一生補處の如く、十五の満月は已

に凡夫煩惱の闇黒失ないて円満正覺の仏位と成りし如し。例えば竜樹天親の如き、天台慧遠の如き、善導達摩の如き、空海法然の如き、親鸞日蓮の如き、乃至今時何人にも如来の光明に浴し精神的に復活したる人は皆菩薩格とす。今正に仏陀が吾人を教導し玉う本意は、人々如来の光明に摂化せられ菩薩の格に入らしむるにあり。

仏陀。仏陀と菩薩とは因果の別にて光明の大道に信入して新月の形態となりて次第に増進して十四夜に至るを菩薩の満位にして十五夜は仏陀に昇りし姿なり。仏陀は独り釈迦文仏のみ現世界に在す。今経の三相五徳は仏陀が弥陀の光明に依て宗教的に円満に靈化したる徳相を現わし玉う。今仏教に就て道德の動機を五階に立て其高低と大小を区別することを得。一、人道的。二、天道的。三、二乗的。四、菩薩。五、仏陀、各其動機を異にす。

一、人道的動機。是は人道を本意としての道德動機若は民族若は社会的に人類相互の間に義務を重じ、社会の福利を計り、社会の為が即ち自己の為なので、仁慈を以て

相愛し、全く人間として常倫の動機よりのもの。

二、天道的動機。所謂汝が敵を愛せよ、また徳を以て怨に酬いよ縦令他人が我に害を与えようと汝は之に酬いざれ。如何にとなれば、天の父は毫も悪を欲し玉わずと
いう如きの動機を天道的道徳と云う。

三、二乗道徳動機。二乗は相對なる善惡の道徳を超越して高く無漏の聖道に入り、
彼らは世の人の善惡は共に生死の業道にして眞の道徳の価値なし。若し生死を越たる
眞寂涅槃に通達する道のみ眞の道徳なりとす。是を二乗の道徳と云う。

菩薩の道徳心。菩薩は二乗の如く真空無為に入ることのみを欣わず、菩薩は絶対の
実在者の無縁の慈悲を理想とし、如来は一りの慈父にて一切衆生は悉く皆同胞であ
る。如来の一慈悲の本に一切を度せずんば止まずとの、聖意を奉じて我意とす。

菩薩は常に上は如来の聖寵を被わり下はすべて其聖寵を頒つ。一切の善一切の徳は
悉く如来が靈力を賜いて使い玉うことなれば、いかなる善も誇るべき理なく、六度

八正四摂等を以て如来の聖意が身の三業に現わるる菩薩は如来の聖意なる阿耨菩提を以て道德の動機とす。故に最も広大にして又無尽なり。

仏陀道德心。仏陀は本大慈父の人格現なれば、無条件の慈悲を以て常恒不斷に衆生を度し玉う。喻えば太陽の万物を照す、無心にして万物を照し生物を長養すれども未だ曾て我万物を長養すと思わざる如し。仏陀は万徳光明円かに備わり、無意自然にして一切衆生を常恒に利益し給う。道德心は宇宙に周遍し自然に其功德を施及し給う。之を仏陀道德心とす。有ゆる世界に於て仏陀の教の及ぶ所邪を捨て正に帰し惡を廃して善に進む。仏陀の常恒徳化の妙用は太陽の力にて万物を化育するよりも広大なり。之を仏陀道德心と云う。

大乘の道德

先に人格三位の中に靈格のみが生死の迷を超て絶対の根柢に至たる人格を明しぬ。
靈格三等の中声聞と縁覺とは実は未だ絶対なる父の聖意と合し得ぬ。唯菩薩の道心の
みが全く絶対の父を父とし自分のみでなく、一切衆生と共に平等に靈に活き父の完き
如くに一切と共に完成し同じく常住の平和を得んとの願望を以て目的とす。之の菩提
心が自己を完成する道德の根柢ともなる。仏陀が自から道德的最英靈的人格の光明
を以て自から最勝無上の大道徳の立脚地に安住して自己を標準として一切の子等の志
望を建しむるに善惡(相對)六道の迷衢を出で二乘偏狹の小徑を越て無上光明の大道
に立よと絶叫し給えり。此の阿耨の大道は一切諸仏同一の光明大道なり。諸仏斯大
道より無上の帝王位に登れり。是一切諸仏通達帝都の最勝道なり。斯大道終局中心
の帝都は無上法王無量光の嚴臨し給う大涅槃の帝都、此絶対無上の帝都を蓮華蔵界と
も常寂光とも云う。

仏陀出世の一大事は一切衆生をして斯無上の大道に誘引し完全円満なる人格とし一

切さいと共に常住じやうじゆうの安寧あんねいを得えせしめんが為ためなり。此この大道だいどうのみ最高徳さいこうとくと最幸福さいこうふくとの一致いつちする王都おうとである。一切衆生いつさいしゆじゆうは斯光明このこうみゆうの大道だいどうに立つことを求めず。只自己ただじこの迷妄めいもうなる心こころに惑まどうて竟ついにに六道ろくどうの迷途めいどを脱だつすることができぬのである。

菩 提 心

絶対ぜつたいなる父ちちの在ある帝都ていとを阿耨菩提あのかぼだいと名づけ、彼かれに通達つうだつする大道だいどうをまた阿耨菩提あのかぼだいと云いう。斯大道このだいどうに志こころざしを發はつしたるを發菩提心はつぼだいしんと云いい、志こころざしを立てたる人を菩薩ひとばさつと云いう。また法王子ほうおうじと名づけ、斯菩提心このぼだいしんを發おこす時は上求菩提じやうくぼだいと下化衆生げけしゆじゆうとの二心にしんを具ぐす。上求菩じやうくぼ提だい(向上)願ねがは我れ諸仏しよぶつの完全かんぜんなる如ごとくに我われも同じく万徳豊備まんとくほうびして欠かくことなき人じん格かくにならんと願望がんもつにて、下化衆生げけしゆじゆうとは一切衆生いつさいしゆじゆうは本われと我われと同一どういつの眞性しんじやうなれば我われは一切さいともと共に同じく無上道むじやうどうを得え、福利ふくりを齊ひとしうしたしとの欲求よつきゅうである。

今宗教心を以て通仏教の菩提心を明さば回向発願心と云い願往生心とも云う。願生心に就て聖曇鸞は斯の如くに釈せり。若人彼浄土の受樂無間なるを聞て樂を貪る爲の故に往生を樂うは甚不可なり。願往生心とは、願作仏心願度衆生心、願与一切共に安樂國に生ぜんとの發願心ならざるべからずと。実に然り。是全通仏教と宗教との同一帰趣の發心なり。

今宗教に道德心の基本と爲る菩提心を釈するに、菩提心に四心具することを明さん。一、願生心。二、願作仏心。三、願度衆生心。四、願我与一切共安寧心、此具四菩提即ち是道德心の根本なり。是最高等なる理想道德心なり。

一、願生心

菩提心を今宗教的に光明大道と云う。

即ち無量光明王都に通達する大道の義。

願生心とは如来の法王子として、靈き生命に生れ度しと云義。從來の主我は善惡不定意志なれば、闇黒に迷いたる我が今は如来の光明を被りて新しく靈聖き人に生れ度との願生心を云う。

此靈に生んと願望心に具すべき三心あり。一、至心に如来を眞実の慈父と信ずること。二、至心に如来の慈父を愛樂すること。三、慈父の全き如くに成らんと欲望。

一、如来を眞の父と信ずるは元來人は肉は人の子なれども、仏性は如来の子なり。然も人の天然は只肉体の方面が発達して靈性は未だ萌發せぬ。実に万徳圓滿の慈父は我等迷子の為に久遠劫の往昔より未だ曾て須臾も安じ玉わず。迹を衆生界に垂れて難作難行縱令身を八熱の獄火に置くとも子らが為には忍んで悔じとの子を憐み玉う親心を今は唯安らかに眞に親心を信受して赤子の母に對する如くに如来を信ずれば必ず慈悲のミオヤの恩寵を被りて、ミオヤを眞にミオヤと信じらるるに至らん。

二、如来を眞のミオヤと愛樂する心。如来を信じて益々信仰心が進みて感情的に如

来を信ずる、温暖なる活気が生じ、ミオヤと子との間に靈の血が通うように生命のあ
る信心となれば、靈のミオヤに對する愛慕の念は弥増て中心之を嘉せば何の日か之を
忘れんという如きの麗わしき念が熾んに為り、而して此ミオヤを愛樂する信念が血も
肉もミオヤに靈育せられてミオヤの子たる靈の生命となり、益々靈我の内容実質がミ
オヤの大慈悲に養われて全く畜に知識の上のミオヤと子のみに非ず、感情的に血の通
う親子の愛情が増長するのである。此愛念が弥々進む時は、法華經の、一心に仏を見
んと欲して自から身命を惜まず如来を慕い恋う時は仏は出て為に説法し玉うとの如く
に、愛情がすすみ、愛の信念の最終は、ミオヤと我と大と小とが三密融合し入我々入
の神秘的靈交の状態に至るものである。

三、欲望心とは、如来の子とし聖の世嗣とならんと欲望如来の全き如く為らんと
の欣求ミオヤの所有は悉く吾所有なれば、所有智慧と福德すべてを譲与せられ、ミ
オヤに養われて、一切諸仏の如く永遠の生命と常住の平和を得べき望等なり。此願望

なければ、仏ほとけと成ることできぬ。此欲望心このよくぼうしんより發達はつたつし出たのが願作仏心がんさぶつしんである。

二、願作仏心

已すでに我われらは如来にやらいの子として生うれたり。釈尊しゃくそんの羅毘尼園らびにおんに於おいて卯月うづき八日の飲よろこびの聲こえを称となえたり。生うれた計はかりでは慈愛じあいの深ふかき母ははの懷ふところの外そと顔がさえも見みえぬ、一心しんしやうねん称念との唱となえ聲こえに慈悲じひの乳房ちぶさは哺ふくせられて靈れいに育はぐまるる。

大慈父だいじふは我われらが有あゆる限かぎり賦与ふよせられたる天稟てんりんの仏性ぶつしやうを開かい發はつして靈我實現れいがじつげん的に活動かつどうし、而しかして如来にやらいの聖意せいいを意こころとして終生努力しゆうせいどりよくすべく使命しめいし玉たまう。其天与そのてんよの靈性れいしやうも開かい發はつすべき機き會かいを与あたえざれば開かい發はつできぬ。願作仏心がんさぶつしんとは、ミオヤの子ことしてのすべてを完成かんせいすべき完成かんせいせんと願望心がんもうしんである。如来にやらいは一切衆生いっさいしゆじやうの父母ふぼである。慈悲じひの父母ふぼとして衆生しゆじやうに照臨しやうりんし玉たまうに、三みつの靈德れいどくを以もつて我等われらを開かい發はつし靈化れいかし玉たまう。三德さんどくとは、一、神聖しんせい、

二、正義、三、恩寵である。中に就て神聖と正義とは父にて恩寵は母の如に例せらる。通仏教に謂ゆる法身と般若と解脱との三徳に比す。

一、神聖とは、如來一切衆生の嚴肅なる家庭の父として吾人の行為を照鑑し玉う智慧である。如來は一切道徳律の原則として神聖の智慧は明鏡を以て如実に衆生の身口意の三業を照見し玉う。法華に我常に衆生の行道と不行道を知りて其度すべき所に随つて衆生を度すと云うは是である。如來の神聖の光は太陽の光の如くに相對的に外界より照すにあらず、絶對的威神の光明は衆生の直覺的に正知見(良心)として囁き來る命令の声である。宇宙に是の如く道徳秩序の理法存在することは天の日月星辰の運行する軌道の存する如く天則の理法は人為則よりは神聖である。万物何人も犯すべからず。善惡の根本原理は法爾として定ておる故に通仏教に道徳律の根本は法性法然の理法にして一切諸仏の造作に非ず。常然の常則なれば、諸仏出世して本然の常法を衆生の為に開示し玉うものとす。故に釈尊正覺を成じ玉うや、直に梵網三昧に入て本

仏ぶつの誦じゆし玉たまう道德律どうとくりつの根本菩薩戒藏波羅提木叉こんぽんぼさつかいぞうはらだいもくしやを聴き玉たまうた。經きやうに「廬舍那るしやな仏ぶつ方に蓮華れんげ台だいに坐ざす。周匝しゆうさうせる千華せんげの上に亦千またせんの釈迦しやかを現げんず。一華いつけに百億ひやくおく國こくあり。一國いつこくに一釈迦いつしやかあり。各おのおの菩提樹下だいじゆげに坐ざして、一時いちじに仏道ぶつどうを成じようず。是この千せんと百億ひやくおくとは廬舍那るしやなを本身ほんしんとなす。千せんと百億ひやくおくとの釈迦しやかが各微塵衆おのおのみじんしゆうを摂せつして俱ともに我所わがところに來至らいしして我わが仏戒ぶつかいを誦じゆするを聴きいて甘露かんろの門もん即すなわち開ひらく。是時このときに千せんと百億ひやくおくとの釈迦しやかが本道場ほんどうじやうに至いたつ各々おのおの我わが本師わがほんしの戒かい十重じゆう四十八しゆじふはちを誦じゆす。戒かいは明あきらなる日月にちげつの如ごとく亦瓔珞珠またようらくじゆの如ごとく。一切いつさいの菩薩衆ぼさつしゆう是これに由よつて正しやう覺かくを成じようず。是廬舍那これるしやな誦じゆし玉たまう。我われもまた是かくの如ごとく誦じゆす。汝なんじ新學しんがくの菩薩頂戴ぼさつちやうだいして戒かいを受じゆ持じせよ。是この戒かいを誦じゆし已おわつて転てんじて諸もろもろの衆生しゆじやうに授さずくべし。諦あきらかに聴きけ。是これ正しやうしく仏ぶつ法ぽう中の戒藏波羅提木叉かいぞうはらだいもくしやを誦じゆすべし。大衆心だいしゆうしんに諦あきらかに信しんぜよ。汝なんじは是これ當成とうじやうの仏ぶつ、我われは是これ已成いじやうの仏ぶつなりと。常つねに是ごとの如ごときの信しんを作おこさば戒品かいほん已すでに具足ぐそくす。一切いつさいの心しんあらん者ものは皆みな應まさに仏戒ぶつかいを受うくべし。衆生しゆじやう仏戒ぶつかいを受うくれば即すなわち諸仏しよぶつの位くらいに入る。位大覺くらだいかくに同どうじ已おわらば真しんに是諸これしよぶつ仏ぶつの子みこなり」と。是通これつう仏教ぶつきやうにて道德律どうとくりつの根本こんぽんなる、波羅提木叉はらだいもくしやは法性常然ほつしやうじやうねん

の理法なれば、千聖も易えず、仏も改めず。故に宇宙の本尊たる盧舎那が有ゆる分身の釈迦を徵集して自ら誦し玉い、而して分身一切の釈迦に聴かしめ、此常然の道德法を以て一切衆生に則らしむべき旨を命じ玉えるのである。

其道徳律の根本戒体とは是一切衆生本有の仏性を開くべき法則である。衆生には道德の本体たる仏性を具有して居る。また之を開発すべき契機を菩薩戒藏波羅提木叉と云。其戒法は無尽である。之を三種に聚む。

一、摂律儀戒（不作一切罪）二、摂善法戒（作一切善）三、饒益有情戒（利益一切衆生）。此を菩薩三聚淨戒と云。一切の止惡作善利益衆生の道德法を摂して遺すことなし。

諸の仏子は此戒法を受けて熱誠なれば、戒体発得す。發得とは喩えば、衆生本有の仏性は蠟燭の如く、戒を發得すとは燭に火を点じたる如く、一度燭に火を点じて燈るときは其心意中に燈しつゝある戒光が自己の行為の道倫を照して如実の行為を成し得ら

る。

此を宗教的に云わば如来の神聖の光明が人の信心開くれば正知見の眼と成て聖意に叶わざる惡を去り聖意に称う善に就く。其自己の行為を照す光明の下に知見の眼は開けたるなり。之を如来の神聖と人の正知見との合したる状態とす。

二、正義。神聖が眼とすれば正義は道を行ふ足である。如来が衆生の道徳行為の鑑督としては正義である。惡を捨て正善に竭すの行為せよとの意志、如来の正義の現れは、宇宙に存し、すべて世の中に惡は嫌忌せらるる性を持ち善は称揚せらるる徳を有す。善は栄え惡は滅ぶ。善は光明にて惡は闇黒である。すべての罪惡不義邪逆等は皆闇黒の中に働く惡徳にて一切の正善真美等は光明の方面に向つて進む性質である。弥陀は清淨国土を建設するに、国土の塵を捨て妙を選び、人天の惡を排し善を取り眞善微妙の清淨國を立玉えり。捨惡選善は是正義である。善惡相交正邪相混する処に清淨界は立難し。故に弥陀光明中の靈に活き向上の一路を辿るものは弥陀の聖意

に活きよ。聖意せい是正これせい義なり。一切いっさいの弥陀みだの与え玉たまう力を力ちからとし、一切いっさいの邪惡じやあく難毒なんどくと奮ふん闘とうして勝利しょうりの凱歌がいかを以て人生じんせいの月桂冠げつけいかんを戴いただけよ。神聖しんせいは道德律どうとくりつの太陽たいようにして我われらが正しょう知見ちけんの眼まなこを開き如來正義にょらいせいぎの大道だいどうに立てば八正十善はつしうじゅうぜんの足あしを運はこぶ。如來にょらいは常つねに吾人ごじんの心中しんちゆうに在まじまして、我われらに無限むげんの力ちからを与え玉たまう。之に参与さんよして最善さいぜんの努力どりよくするは是正義これせいぎである。

三、恩寵おんちよう。衆生の靈しゆじようの母ははたる恩寵おんちようの光明こうみゆうは常恒じようごうに普あまねく一切衆生いっさいしゆじようの身心しんじんを照てらして捨て玉すてたまわす。如來にょらいと我われとは靈的れいてきの親子おやこである。此親子このおやこの信念しんねんの關係かんけいに三縁さんねんあり。一、親縁しんれい。二、近縁こんねん。三、増上縁ぞうじようえん。我われらは如來にょらいの靈子れいしである。ミオヤの恩寵おんちようを離はなれて心靈しんれいの發育はついくすべき理由りゆうなし。我われらが靈れいはいかにして養育よういくせらるることを得うるぞ。經きやうに曰いわく如來にょらいの恩寵おんちようの光ひかりは普あまねく一切いっさいに徧照へんじようして如來にょらいを信じ如來にょらいを念ねんずる衆生しゆじようが此光明このこうみゆうに摂せつせられて保育ほいくせらるる。一、親縁しんねん、我われら聖名みなを呼び奉たてまつれば如來にょらいは之これを聞玉ききたまい、我われらが敬礼きやうらいすれば如來にょらいは之これを見玉みたまい、我われらが頼たよる念ねんは如來にょらいは能よく知り玉たまい、我われらが如來にょらいを愛念あいねんすれば、如來にょらいも亦我またわれらを愛念あいねんし玉たまうと。あなたの三業さんごうと此身このみの三業さんごうと相捨離あいしやりせぬ故ゆえに親しん

縁えんと云いう。二、近縁ごんねん、如来にょらいは我われらが心靈しんれいのオヤ子こなれば、縦令瞑目たとえめいもくしても心眼しんがんの中うちに在まじして現前げんぜんす。虚空法界こくうほうかいはあなたあなたの御心みこころの充みせ玉たまう処故ところゆえに我等われらが心こころも、あなたあなたの心こころの中うちなれば毫ごうも隔へだてはない。清霄中空せいしやうちゆうくうに輝かがやく月つきは我われらが眺ながむる眼睛がんせいちゆう中ちゆうに入り、我われらが念ねんずる心こころの中うちに如来にょらいは常つねに宿やどり玉たまう。之これを近縁ごんねんとす。三、増上縁ぞうじやうえんとは、此方こちらは力弱ちからよわく彼身あなの力ちからは非常ひじように強つよくして我われらを助たすけ玉たまう。例たとえば闇黒あんこくと光明こうみようとは光明こうみよう強つよきが故ゆえに闇黒あんこくは光明こうみように失うしなうてしましまう。我われらが煩惱ぼんのうの闇やみも如来にょらいの光明こうみようの増上縁ぞうじやうえんに助たすけられて而しかして其増上そのぞうじやうの力ちからには太陽たいようの万物ばんぶつを化育かいくする如ごとくに我等われらが煩惱ぼんのうも薄うすらぎて大だいなる靈れいの力ちからを与あたえられて、ミオヤの全まったき如ごとくに靈育れいいくせられ、また靈化れいかせらるる、之これを増上縁ぞうじやうえんと云いう。

願作仏心がんさくぶつしんは一切諸仏いっさいしよぶつの如ごとく慈悲万徳じひまんとくを悉ことごとく与あたえられて發達はつたつしつつゆくのである。如来にょらいの神聖正義しんせいせいぎ恩寵おんちようとの関連かんれんは吾われらが如来にょらいの靈育れいいくを被こうむる順序じゆんじよとしては恩寵おんちようと神聖しんせいと正義せいぎとに次第しだいす。其故そのゆえは恩寵おんちようは母ははの児こを育そだつる如ごとく成なるを初はじめは一分如来いちぶんにょらいを慈母じぼの如ごと

くに恩寵おんちようを仰あおいで信樂しんぎようし念仏ねんぶつす。如來三緣にょらいさんねんの増上緣ぞうじようえんに助成じよせいせられて、漸次ぜんじに信念しんねんが発育はついくす。然しかる時ときは小兒しょうにの發育はついくに随したがつて眼まなこも視みゆる如ごとくに正知見しょうちけんの眼まなこも漸ようく開ひらけ微かすかにも神聖せいせいの聖意せいいの光ひかりを知見ちけんするに真しんの道德秩序どうとくちつじよの自覺じかくをう。また聖意しょういの道みちを行ゆく正義せいぎの足あしも初はじめの程ほどは願たおれ易やすきも漸次ぜんじに健全けんぜんに發達はつたつしゆく。併しかしながら是これ恩寵おんちようなる母ははの養育よういくを被こうむれば、頓とみに父ちちの神聖正義しんせいせいぎの道みちを視み、また歩行ほこうするに至いたる。是かくの如ごときの因緣いんねんを以もつて恩寵おんちようと神聖しんせいと正義せいぎとの次第しだいとす。

願作がんさぶつしん仏心ぶつしんは約やくして云いわば光ひかりを被こうむりて仏陀ぶつだの世よの英靈えいれい最高德さいこうとくの聖者しょうじやに倣ならいて完全かんぜん円満えんまんを期きするにあり。

三、願度衆生心

通仏教つうぶつぎやうに云いわば一切いっさいの諸仏しよぶつは一切いっさいの衆生しゆじやうを度どして而しかして後自のちみづからの成仏じやうぶつを期ごす。六度ろくど

万行を以て自他兼濟し四摂法を以て一切を摂す。諸の菩薩衆生を化導せんと欲し此四法を以て摂受して然して後に大乘の正道に入らしむと。

一、布施摂。菩薩財法二種の布施を以て衆生を摂す。若し衆生財に乏しく今日の生活に困む人の為には方便して財を以て彼に施して、亦財物は乏しからざるも法に飢ておる人には種々の法を施して彼に満足を与え親愛の心を生ぜしめ其をして道に引入て真理に住することを得。之を布施摂と云う。

二、愛語摂。元來大体の人には我愛と我慢を以て自から許して居る。而して機類区なり。夫らに対して真実に彼を愛する心より、善言を以て彼を慰藉する時は自然と彼我の情が融合する。故に彼の善心を誘致して彼をして親愛の心を生ぜしめ彼の心を引附て道を説て而して真理に住し得らるるようにする。之を愛語摂と云う。

三、利行摂。是は行為を以て他の意を引附る。自分が最善の行為を以て彼を利し彼を益す。至誠心より出づる行為は彼を動かす自然と親愛の心を生ぜしめ、之に依附し

て道を以て彼を眞の仏の法に住せしむ。此を利行摂と名づく。

四、同事摂。彼を引摂するに啻に精神的に同情同意たるのみに非ず。彼の趣好する處に隨ひて藝術の如きも共に趣味を分け樂を共にして其間に情の融合する處親愛の心を生じ之に依附して彼をして眞の道に入らしむ。之を同事摂と曰う。

菩薩に四無量心あり。之を以て衆生を利す。無量と云は菩薩は利他の心廣大なり。度せんと爲す衆生も無量なる故に、度したいの心もまた無量の故に四無量心と云う。

一、慈無量心。慈とは愛念に名づく即ち与樂の心である。菩薩は一切衆生を眞実に愛念して常に彼が心を安じ満足せしめ、自分が如来の大悲に懷かれて眞実の勝妙樂を得る故に願くば彼も我と同じく、如来の眞実勝妙樂を得させま欲しく之を慈無量心と云う。

二、悲無量心。悲とは愍傷の名にて彼が苦に対する同情である。菩薩は衆生の苦悩に對する同情に耐えず。いかにして彼が苦を抜き平和を得させ欲しく方便して救済し

て拔苦はつくの道みちの爲ために心こころを摧くだきて解脱げだつさせまほしく、弥陀みだの絶對ぜつたいなる力ちからに依よらざれば、眞しんの衆生しゅじやうの苦惱くのお煩悶はんもんは解脱げだつし難がたし、方便ほうべんして彼かれに弥陀みだの大悲だいひを伝つたえて信心しんじんを得えせしむるこころ無量むりやう。

三、喜無量心きむりやうしん。菩薩ぼさつは自己じこが如来にょらいの靈れいに充みたされ、法喜ほうき禅悦ぜんえつ常に歡喜かんきに充みたさる故ゆえに他たのすべてを誘いざなひ自己じこと同じく如来にょらい歡喜かんきの光明こうみ裡りに欣慶ごんけい無尽むじんの法ほうを得えさせ度たき心こころを喜き無量心むりやうしんと云いう。

四、捨無量心しやむりやうしん。菩薩ぼさつの心こころは何人なんびとに對たいしても憎愛ぞうあいの心こころなく平等びやうどうである。故ゆえに常つねに瞋恨しんこん怨惱えんのう不平へいふ不滿まんの念ねんなく常時じやうじに平和へいわなり。依よつて衆生しゅじやうを誘引ゆういんして同じく公平こうへい正大せいだい不偏ふへん不私ふしにして常つねに平和へいわと満足まんぞくを得えせたき心こころ、無量むりやう。之これを捨無量心しやむりやうしんと云いう。

願度衆生心がんどしゅじやうしんの外ほかにあらず。一切いっさい衆生しゅじやうは本同もとどう一弥陀いつみだの子こである。然しかれば本もと是同胞これどうぼうである。一度絶對ひとたびぜつたいなる本国ほんこくを迷まよひ出でて相對そうたい生死しやうじの身みを受うくれば因緣いんねん無量むりやうにして所受しよじゆの身みもまた無量むりやうに差別さべつし種々しゅじゆの種類しゆるい、種々しゅじゆの身み、種々しゅじゆの根性こんじやう斯ごとの如このみく此身このみを受うくれば、若もし

みづかみだ だいあい おんちよう れいか
自ら弥陀大愛の恩寵に靈化せられて心靈活て靈の生命に入り初めて自己弥陀の子たる
ことを自覺する時は、一切衆生悉く同一眞性眞の同胞なれば、之を誘うて大慈父
の光明に攝取せらるる。之を度衆生心と名づく。即ち自ら信じ人を教えて信ぜし
め、大悲を伝えて普く化す。是眞の報仏恩である。

願共衆生同得安寧

ぶつきようどうとく きしゆ ところここ
仏教道德の歸趣する処愛にあり。即ち一切衆生と共に同じく安寧を得んと爲にあり。
おほ りんり がくしゃ どうとくしゆうきよく きちやく
多く倫理学者の道德終極の歸着する所普遍的幸福即ち安寧を得るにありと。唯幸福を
もくてき す とく どうとく だらく おちいる
目的と爲る時は道德の墮落に陥あり。安寧は独の幸福に非ず、一切と共に平等の幸
福の故に高等である。是カントの謂ゆる最高徳と最幸福の一致する処、慈父が一切衆
生の爲に建設する処の浄土は至幸至善の一致する処の最高理想の実現する所である。

彌陀みだ選せん択ちやく本願ほんがんに国土こくどの廉そを捨すて妙みょうを取り穢えを捨すて淨じようを選えらみしは是これ淨土じようどの最さい幸福こうふくの義ぎ。人天にんてんの惡あくを捨すて善ぜんを選えらみ、邪じやを捨すて正せいを取り、淨土じようどを莊嚴しょうごんするは是これ最高德こうとうとくの義ぎである。

一切衆生いつさいしゆじようと共に普偏ふへん的てきの幸福こうふくと高德こうとくとの極致きよくちの処ところは即すなわち彌陀みだの淨土じようどである。一切衆生いつさいしゆじようと共に同じく彌陀光みだこう明界めいがいの人ひととなる。

大乘だいじよう仏教ぶつぎやうの道德どうとくの目的もくてき爰こゝに在あり。平等びやうどうの安寧あんねいを期きす。此理このり想そうの実現じつげんしたる処ところを、天國てんこくまた極樂ごくらく淨土じようどと名なづく。夫それを死後しごの彼岸ひがんに求もとむるは超然ちやうぜん教きやうにて如來にょらいは絶對ぜつたいなれば東西とうせいの別べつなく、また現在げんざいと未來みらいの別べつもなく、只衆生ただしゆじようが罪惡ざいあく垢障くしやうの心こころを以もつて相互そうごに世界せかいを競争きさう場裡じやうりに見みておる。若もし如來にょらい光明こうみょうに照てらされて心機しんき一變いつぺんし絶對ぜつたいなる如來にょらいの光明こうみょう中に復活ふかつして觀かんずる時ときは、娑婆しやば即すなわち寂光じやくかう、此処ここを去さらずして如來にょらい光明こうみょうである。真善美妙しんぜんびみょうの華句はなぐに常樂我淨じやうらくがじようの樂園らくえんにて、神かみは光明こうみょう界がいに在あり乍ながら身みには神聖正義しんせいせいぎの父ちちの使命しめいを以もつて世よの罪惡ざいあくと健闘けんとうし常に恩寵おんちやうの光ひかりの増上緣ぞうじやうえんを以もつて勝利しょうりを必ひつし、報身ほうしん如來にょらいに

与えられたる力を以て最善の努力を為す。ここに於て相互に勧誘してこゝに理想の安寧界を建立し、弥々報命終る時は実在の安寧界に帰す。

汝が身心は肉と我との慾を貪らんが為の器に非ず
靈我の理想を実現せんが為に与えられたる具なり

五 戒

殺すこと勿れ、汝が靈格を
偷むこと勿れ、努力の光陰を
娯する勿れ、天魔の使と
酔うこと勿れ、肉と我とに
欺く勿れ、己が良心を